

凡例

1. 原ノート

萱野茂二風谷アイヌ資料館に収蔵されている「金成マツノート整理番号35」 yukara utomkot chashi (ユカラ ぴたりと引ついた城) のローマ字筆記体の判読・片仮名化・逐語訳・意識(日本語訳)をしたものである。ノートは1～105頁の分量である。

原ノートの1頁には、昭和22年5月25日とあり、「金成マツノート整理番号35」の最終頁には昭和22年6月20日との記載があることから、この間に書かれたもので間違いないと思われる。

本書には、原ノートの頁の始まりを左上に示している。

2. 金成マツノートの整理方法

1 段目 ローマ字のアイヌ語の原文

2 段目 片仮名表記

3 段目 逐語訳

4 段目 意識

となっている。

①筆記体のローマ字を判読する際は、原ノート通りの表記とした。

②片仮名表記は、原ノートに濁音で書かれているものは表記通りとした。

③原文ローマ字段の数字は原ノートの行を累計で示している。p. 1～p. 105は原文ノートの頁を示し、その頁の最初の行のところに付記した。

Yukara utomkot chashi ユカラ ウトムコツ チャシ (びたりと引ついた城)

あらすじ：萱野志朗

登場人物

1. 私 (龍神の息子) <主人公>
2. 私の育ての姉
3. 私の育ての姉の年若い兄 (キムヌブの城を守っている)
4. 私の育ての姉の兄 (コタンラの兄、コタンラウンクル)
5. 私 (龍神の息子) の父
6. 私 (龍神の息子) の母<コタンパウムマツ、龍神の若い妹>
7. 私 (龍神の息子) の伯父 (父方)
8. コタンラの少女 (育ての姉の妹、コタンラウムマツ)
9. コタンパウンクル (育ての姉の結婚相手、いくさに駆け付けた人)
10. 少年 (サンケキヌヌブ城に住む女の連れ合い)
11. ポンヤウンペ (私のもう一つの呼び名)
12. 貧しい老夫婦
13. 貧しい老夫婦の娘

<私 (龍神の息子) >

私はこの大きい家の中で生まれ、育ての姉に立派に育てられ、何に不自由することも無く本当に丁寧に育てられ成長した。

その家の中は美しく飾り立てられおり、黄金の行器や黄金の筐などが並べられ、木製の行器と黄金の筐や木の筐が入り混じって立ち並び、それらの宝ものは海岸の段丘のように幾重にも列をなしていた。その宝物の上の方には首長が差す太刀が飾られており、その太刀には二つないし三つの垂れ下がった紐の端が付いていた。それらの房飾りが揺れると美しく光り輝き、それらは神々しい輝きを放っていた。

それらの列の下手、すなわち右座の隅には黄金の女の筐が置かれていて、その前には黄金の枕がある。その上の方には立派な刺繍衣がたくさん掛けられており、衣装掛けの竿が撓 (たわ) み、それらの衣装は二つの神光を放ち三つの神光が共に光り輝き眩いばかりであった。

この家の床は黄金で入口から奥に向かって平坦になっており、横座はきらきらと光り輝き、黄金の炉縁の上はルマイペ色 (牡蠣の貝殻の内側のような色) で輝き、私はとても気持ちよかった。

宝壇の手前には、移動自在の黄金の寝台が置いてあり、私は育ての姉に「この寝台はあなたの父のものであったが、あなたは大きくなったのでこの寝台で寝てもよい」と言われた。

私は独りでその寝台で寝るのにも慣れてきた。育ての姉は、家の中をいつもきれいに掃

除していた。育ての姉は、私のために美味しい食べ物を作ってくれた。私はおもちゃの小弓で柱を射たりして遊んでいた。また、宝器の列の上を自分で彫刻したもので飾りつけたり、刀の鞘や剣室に彫刻をしながら暮らしていた。一方、育ての姉は刺繍に夢中になって、二つの黄金の渦巻きや三つの黄金の渦巻きがより集まった模様を描き、私はそれらの刺繍を見て、感嘆の声を上げながら暮らしていた。「育ての姉は何と美しいことだろうか」と、私は思いながら一緒に暮らしていた。

<育ての姉の話>

育ての姉は、私に次のように話してくれた。「先祖の話をするので炉端に来てください」と言った。先祖の話を知りたいと思っていた私は、横座に座った。育ての姉は右座に座り話し始めた。トミサンペチシヌタブカの二人兄弟の弟が、あなたの父親で、その兄弟の兄は、すなわちあなたの伯父で、二人兄弟はコタンラに住んでいた。あなたの父と伯父は、美貌と勇気と雄弁が兼ね備わっていて、狩猟もとても上手であった。

ところが、遠くの者たちが結託して、ひどいいきさをトミサンペチに仕掛けてきた。ここで、沖の人の島へ宝物を持って行き協力を頼み、攻めてくる者たちに対抗するためその者たちと一緒に闘（とき）の声を上げた。あなたの父と伯父は、子供であったのでいきの間、二つの海を三つの海を回りいきさに立ち向かっていた。その時に、コタンパウンクルは、妹二人と合計三人で駆けつけてきてくれた。

天国の龍神は、二人兄弟で妹が二人いた。年若い龍神の妹は、天国で結婚することになっていたが、神とは結婚せずに、人間の国土、トミサンペチシヌタブカを見ていて、美貌と勇気と雄弁を兼ね備えたあなたの父に惚れて結婚した。あなたの伯父（父の兄）も龍神の年長の妹（コタムパウムマツ）と結婚した。あなたの伯父たちは、村の下手の城に住んでいた。あなたの父は、この立派な御座所の上流と下流を治めていた。キムヌブカの城であなたの父と伯父たちは暮らしている。コタンパウンクルも神の淑女と結婚した。

あなたの父と伯父は、山でも海でも獲物に恵まれていた。あなたの父の妻（すなわちあなたの母）の兄が、コタンラウンクルなのだ。あなたの母は、龍神の妹なのであるから、神を母に持つのがあなたなのだ。

あなたはコタンラウムマツと一緒に育てられ、コタンラウムマツは私の妹で、あなたは私の妹と結婚し、先祖を受け継ぐことになるでしょう、と言いつたされている。

コタンラウンクルと私は結婚することになっている。そして私の兄は、天から年若い召使を連れて来て結婚しある村を守っている。

私の年若い兄は、キムヌブで建ち並ぶ城の中を神の私の兄嫁とともに守っている。それからコタンラウンクル年若い私の兄は、まだ自分の妹が幼いので、妹を養育中のためいろいろな心配ごとがあった。

<私（龍神の息子）>

私たちの父や伯父たちの氏素性は明らかで、且つ立派で裕福な人たちであったので、同族の「ひどいレプムペ」「悪いレプムペ」の仲間たちから嫉（うと）まれ憎まれ、いきさばか

りたたかいばかりで苦勞の多い生涯であったことを聞き可哀想だ、と私は思った。

先祖のことを誰とも話ができず、私には親戚もなく親類縁者もいないと思っていたが、決して根絶えることのない親類を持っていることを知り、心の底から喜びを禁じ得なかった。

私は早く育ての姉の年若い兄や神の兄嫁たちに私は会いたい。神である私の母が住む城はどれほど飾り立てられているのであろうか。私は早く城を見たいと思った。それから私を育てた姉は、美味しい食べ物を作って私は食べさせられ、また服などを着せてもらいながら成長して二人で暮らしていた。

ある日のこと我が家に小さい者が走ってくる足音がこつこつと鳴り響き、垂れ下がる簾戸をあげながら、霧でその姿を隠した者が入って来たので不思議に思った。私はその霧を呪術で払いながら、相手の顔を見ると年若い少女であったが、何という美貌の持ち主であらうか。

その少女の顔はきらきらと輝き、美しく育てられたらしく立派な小さい刺繍衣を全身に襲ね着しているが、帯を締めずにだらしない格好をして外庭に立っていた。

その少女は、自分の育ての兄から、シヌタブカの年若い兄（すなわち私）へ言づてを持って来たと言った。「またいついくさが起こらないとも限らない。そこで二つ足の付いた神の宝物や三つ足の付いた宝物を隠したいのだが、どこへ宝物を隠したらよいのだろうか。弟の意見を聞かせて欲しい。」というものであった。

私は、その少女（コタンラウンクルの妹）へ次のような伝言を持たせた。「ここにある村の後ろに細い小さい沢があり、その小さい沢に沿った上の方には小さい竹の葦原が生えているので、その竹の葦原の中へ隠せば、見つからないでしょう。」と。

年若い少女（コタンラウンクルの妹）は、育ての兄への言づてを携え、さっと外へ出て行き、ドシンドシと跳ね上がる音を鳴り響かせながら飛んで行った。

私の育ての姉は、「私のコタンラウンクル年若い兄が、そのような返事の伝言を聞いて腹を立て機嫌が悪くならないかが心配だ」と言った。

私の育ての姉の年若い兄（コタンラウンクル）が言づてを聞き、大いに腹を立て垂れ下がる簾戸を肩で跳ねあげながら、自分自身の姿を隠すための小さい霧の丸山のまま入って来た。私は驚きもせず相変わらず刀室の彫刻や剣室の彫刻に没頭していたが、目の端で小さい霧の丸山を呪術で散らして見ると、私の育ての姉のコタンラの年若い兄と言うからもっと大人だろうと考えていたが、まだ少年でありひげが生えそろわないような若者であった。その若者が、黄金の小袖を無双に全身に襲ね着し黄金の鎖を胴に巻き、神授の宝刀を帯に差し、黄金の小さな笠を頭に被り、その笠の下には神々しい顔が太陽のように輝き、勇者の顔色は厳めしかった。

私の育ての姉のコタンラの年若い兄は、私に「無礼な返答をした理由を言え」と迫ってきた。私は「あなたが使いに出した、あなたの妹は帯も締めず、だらしない格好で私に向かって陰部を出して、言づてを言ったのだ。あなたの育て方が悪いのだ。」と言った。

私の育ての姉のコタンラの年若い兄は、私に「妹の育て方が悪かった」と反省し謝罪した。私たちは話し合いのもとに互いを理解し、私は「私の育ての姉のコタンラの年若い兄」と抱き合っただけ喜びあった。私の育ての姉も、その様子を見て安堵した。

私の育ての姉のコタンラの年若い兄は、私に向かって「あなたには霊力がある」と感嘆した。私と私の育ての姉とコタンラの年若い兄と三人は、互いに挨拶をし、美味しい食べ物をいただきながら、いろいろな事を話し合った。神の宝物は「どこへも隠さなくてとも良い」とコタンラの兄へ伝え、その兄も承諾した。

コタンラの兄は「私の年若い妹が妊娠していることや言づてを持って戻り、あなた（弟）にも腹を立てたが、私の妹がこういういきさつを知ったりすると気の毒である。」と思うと言った。私はコタンラの兄へ「あなたの妹さんのことはお任せ下さい」と言った。

二～三年経ったころ、私はコタンラウムマツを忘れることが出来なかった。

私の住んでいる城の櫓のところへ神が降り立つ音が「ゴーゴー」と鳴り響き、少年の若者が訪ねて来た。

その少年は私に「サンケキムヌブ[°]の城に住む私の連れ合いからの言づてを預かってきました。トミサムベチシヌタブ[°]カの弟君よ。あなたが守っている城にはあなたの母が残した鎧があるので、あなたが一人前になったら、祈祷の儀式をしてその鎧を天上へあげて欲しい。」と言った。

育ての姉は、私に「母の装束品を身に着けるように」と言った。黄金の葛籠を開けるとぱっと明るくなり、きらきらと輝いていた。私が成長するまでその鎧は、キムヌブ[°]カから私を守っているという話は聞いていた。私は母が残していった装束品に身を包むと、私の育ての姉は「私の弟は立派である」と言ってくれた。私はシヌタブ[°]カからコタンラに立ち寄ってから母たちの住む神の世界へ行こうと考えていたが、シヌタブ[°]カの家から外へ出ると、平地にでも住んでいるものと思っていたが、岩山の上に大きい城が重なり合うように建っていた。外の祭壇には、ここのかつての城主は狩猟の達人だったので、クマやシカの頭骨がたくさん祀られていた。柵木に当たる風はシューシューと鳴っていた。この御座所を持っていた私の父は、金持ちであり、立派な評判が立った。皆が父を憎んでいたのも、両親は苦しめられ、神の国へ行ったのだった。これらの仕打ちを受けた両親に対して私は可哀想に思った。

私は櫓の上から天空上へ高く舞い上がると、頭上のはるか上で破裂したような音がして尊い神々二～三柱が爆発音を立てて天空へ上っている。空の上から見た黄金の城が、立派であることに私は褒める言葉も無かった。家の中へ入ると宝物や家宝のかおりが風となり、後に押されたが入口へ入った。神々も音を立てながら私に続いて来て、男たちの太刀から出る鏝の音や女たちの懐の宝が鳴り響いていた。兄は私に向かって「シヌタブ[°]カの弟君、ここへ来て座って下さい。」と言った。「親類たちは互いに挨拶をしましょう。炉端に来て下さい」と、兄は言った。

私は横座へ座り、霧の丸山で姿を隠した年若い兄を見つけた。その兄はきらびやかに盛

装していた。私は、年若い兄と挨拶を交わした。兄は「あなたは父親にそっくりである。」と言った。コタンパウンクルたちとコランラウンクルと成長した若い人たちが一つの佩刀一つの装束を身にまとい互いに並んで座っていた。それらの者たちは、私と父の境遇を聞き同情し涙を流していた。

人間の女たちは、私と兄の話聞いてもらい泣きをしていた。私は妹や兄たちと挨拶をし、ほかには年若い召使いの女がいた。その女が、自分自身の姿を隠している兄や私たちの霧を散らそうとしているのを見て、驚嘆と憤怒が沸き起こった。みんなは私の妻（他の人たちは嫁と呼ぶ）に挨拶をしていたが私は「知らん顔を」していた。

私は屈強な仲間を持っている事を嬉しく思った。私はトミサンペチの上流と下流を治めるが、恐ろしい事が起こった時には同族が助けてくれると約束してくれたので心強かった。私は神の国へ酒、木幣（イナウ）、干し魚、脂ののった肉、餅、酒かすなどを贈った。兄は私の杯に酒を注ぎながら「建ち並ぶ城へ行き母の鎧に祈り、神の所へ鎧と一緒に昇っていくよう、神々に聞かせるように頼みます」と言った。

母の鎧というのは、大きい舟のような木の幹のような龍神であった。その龍神の目は星の光のように光を放ち、黄金の鱗の上には白い霧が輝き生きる神のようであり、見る者を驚かせた。

私は兄に教えられた通りに鎧を天に戻すための祈りの儀式を執り行った。すると、天で突然裂けるような音が響き、家の中の神棚の上にあった鎧と呼ばれていたものが、龍神の抜け殻だけとなり、鎧が昇っていく音だと分かった。家の中にいた大勢の人たちは横座の上へ半数は仰向け、半数は俯せになったまま気を失い、大勢の女たちも寄りかかりながら気を失い、右座に年若い兄が一人で座っていた。兄は「同族の人たちよ。意識を取り戻しなさい。神の鎧が天上に楽しく昇り終わったのだ。」と言った。

私の育ての姉は、酒宴の座の中を回ってお酌をしていた。私は行器の後ろに座って、神への祈祷の儀式を行っていた。年若い兄は、コタンパウンクルの傍へ来て座った。

コタンラウムマツはとても美しくなり、刺繍衣を襲ねて着て、遊びの胸紐をつけ、耳輪や首飾りで着飾り、絹糸のような頭髪で頭を覆い、その神々しい顔はひと際目立っていた。

育ての姉の妹（コタンラウムマツ）は、小さい頃、兄に使いに使われた事を恥ずかしく、きまりが悪いようであるが、私はその内容を覚えていない。酒宴へ集まって来た人たちの歌はとても上手で、人間の女の踊りや酒宴の風習や神の頭骨の風習などを見て私は感嘆した。

首長たちは、横座へ代わる代わる降り、踏舞し、鬨の声を上げた。

私の妻（私の育ての姉の妹）は、私に対して二つの恋慕、三つの恋慕を私に見せた。私の妻には魔物が憑き、悪魔が取り憑きあのように振る舞っている者と私は考えた。私は妻を一太刀で斬り殺そうと思ったけれど、立派な頭骨の上を血の海にすることは出来なかった。

年若い兄は「夜も更けたので明日また酒宴を開こう」と言って、酒宴をお開きとした。大勢の人たちは二十の拝礼、三十の拝礼を重ねて帰って行った。

私の育ての姉は、コタンラウンクルの妹とコタンパウンクルの妹と一緒に私を育ててくれた。私の育ての姉と彼女たちはこの家に一緒に泊まることになった。私は、一緒に育った私の育ての姉の妹を嫁にもらい、シヌタブカの御座所を守るはずであったが、「年若い兄の弟君が、シヌタブカの家に行った時に私は恥をかかされた」と兄は言った。一緒に連れ添うものであるのか、神の国で考えて下さい、と言った。年若い兄は、ひどい女、悪い女（コタンラウムマツ）の振り向きざまに太刀で千切り、断ち切ってしまった。その悪い女（コタンラウムマツ）の生霊が昇っていく音がゴーゴーと鳴り響き、天空上で生ける神となり生ける人となり、遠い国の上に音を立てて跳んで行き、その音のあとには空が晴れ渡った。

みんなで家の中や外へ風を送りきれいに掃除をした。風を送り横座や横座の上手（かみて）や玄関、家の外などを美しくきれいにした。

私は安心し横座の上手に美しい寝床をしつらえ兄たちと一緒にそばで横になった。人間の女たちは左座に美しい寝床をしつらえ一緒にそばで横になり眠った。私の育てた姉は、よい食事を作ってくれた。

私たちは、兄に「見た夢の内容を教えて欲しい」と言われた。

みんなで「夢には何か神の思し召しがあるのだろうか。」と言って笑い合った。

年若い私の姉とコタンパウムマツは、異口同音に「ぐっすり眠ったので夢は見なかった。」と答えた。

年若い兄は「コタンラウムマツ、私の年若い妹よ。あなたは夢を見なかったのだろうか。それを私に聞かせてください。」と言った。

コタンラウムマツは「夢は見なかったが、巫術を使ってどういう状況なのかを探ってみた。神の私の嫁はシヌタブカの年若い私の兄に恋をしたが、年若い私の兄は振り返りも振り向きもしなかった。それゆえにしばらく私の兄に二つの恋慕、三つの恋慕をしたので、年若い私の兄はびっくりし、腹を立てて神の私の嫁をひと太刀に斬り殺したが、その女は生き返って遠い国に行ってしまった。その女は、勇者たちに頼みひどいいくさをシヌタブカに仕掛けようとしている。」と言った。また「神の私の嫁と連れ添うならば村人を殺さない。」と、その女が考えていることがわかった。「今から二～三日後にはいくさをする者が、少なからずやって来るだろう」とも言った。

私は、みんながいくさに来た時にいたずらを仕掛けるつもりだ。私は「同族を集めて酒を造って、助け合いましょう」と言った。まず、いくさを仕掛けてくる者たちは、偵察に来るだろう。次に舟で上陸するだろう。そして仮小屋を作り、集まった者たちが飲み食いをして騒ぐだろう。

沖の人たちは「水銀の手」と呼ばれる恐ろしいものを使うので、それらを沼に沈めなさい。上陸に使われた舟をそれぞれ繋ぎ、それらの舟を流しなさい。神の私の嫁のようなみだらな心に取り憑かれた者に刀を抜くのは汚らしい、と私は思った。

ひどい女がした悪事が原因でいくさが始まったにも拘わらず、神の私の嫁が戻った時、レプムベたちは不思議に思い外に出て来るだろう。また、応援に駆け付けて来たポンヤウム

ぺたちも逃げ帰るだろう。

私の合図で同族は雄叫びを上げて、私の計画通りの行動に出た。

年若い兄は、黒い炭を塗り、召使いたちが着ているぼろを着て、本当の召使いのように化した。

神の私の嫁は、「シヌタブカの神のようなお方、私はあなたに恋をしたが、あなたは少しも振り返りもせずについて、大勢の目の前で、私はあなたに斬り殺されたが、神の国へ行くことも出来ない。私が斬り殺されたことが原因で、私は自分の夫を斬り、シヌタブカにくさを仕掛けています。私は人間との結婚は考えられず、神の勇者と結婚したい。」と言った。

私は狂わんばかりの怒りに駆り立てられ、ひどい女を斬って死者の国に踏みつけようと考えた。

私があなたを一太刀で斬り殺したのは、憐れみと可哀想に思ったことだった。女を生き返らせせることを私は許し、召使いとして取りはからった。私はあなたに恋慕されても気づかず、神々に謝るために酒を醸した。祈祷の儀式のあと、私はあなたと結婚するつもりだ。そのひどい女は結婚出来ることを喜んだ。

あのぼろを着た召使いは私の年若い兄なのです。ひどい女は、召使いの男が年若い兄だと知った。その女に飲み残しのお酒を勧めたら飲んだ。

宴に参加していた勇者が少しずつ外へ出ていたが、その女は気づいていなかった。私がその女に酒を勧めている時に、その女には何か気がかりな事があることが分かった。女は「舟に乗って召使いを二～三人連れて来ているので、私はその召使いたちを帰し、私は浜へ行ってからもう一度ここへ戻ってきたい」、と言った。そこで私は、その女が浜へ行くことを促した。家の中では踊る歌声や力足を踏む音と歌声、それと共に男たちの太刀の鏝の音や人間の女たちの懐の宝が美しく鳴り響いていた。

コタンラウムマッは神のように、踊りの先頭をきつく締めて力足を踏み、私の悪い嫁に向かって舌を出しぐるぐると回したが、誰もそれに気付かなかった。私が私の悪い嫁を欺いたことで、私の親族は溜飲を下げあざ笑いながら一緒に進んで行った。

そのような行いに全く気付かない、私の悪い嫁は外の櫓から浜に向かって飛んで行った。兄は私とその盛装を取り換え、私はぼろを着た。神の女もみだらな心に取り憑かれた者であった。知恵の足りない魔人である。

浜で破裂した音が響き、腹を立てた神がどこかの国へ飛び立った。私の同族の者たちが、大勢音を鳴り響かせながらやって来るのが分かった。我が家を訪れた勇者の太刀の鏝の音が美しく鳴り響いた。私は酒宴の席で召使いの格好から神の勇者の衣装に着替えた。

勇者は「向こう側の浜へ忍び足で行ってみると、たくさんのおくさの舟が上陸し、砂州の上に引き上げられている。浜の砂州の上には急ごしらえの仮小屋がたくさん立っている。仮小屋の中では酒を飲む声や食事をする声が騒がしかった。舟の内部には、水銀の鎧がたくさんあり、幅の広い槍や弓でも水銀の矢などもあった。いわゆる水銀の手と呼ばれる物がたくさんあり、食べ物の食糧もたくさん積まれていた。」と言った。

それらを村の後ろにある大きな沼へ運び、相手の武器や食糧、梶や櫂をその底無し沼へ沈めた。

仮小屋の様子を窺うと、どこかの村の者、どこかの国の勇者ばかり首領ばかりが肩を並べ座っており、人間の女は一人もおらず男たちだけで酒を飲んでいて。

私は、神の私の嫁に「シヌタブカへ行くように」と言った。私はトミサムペチへいくさを仕掛けた結果すべてを失い、シヌタブカの名の知れた神の宝物は容器ごと沖の人の島へ運び、私はペソルン城でぐっすり眠っていた。

シヌタブカへ神の私の嫁が遅れてやって来た。私はポンヤウムペの名が知れ渡ったことにびっくりするとともにとても驚いた。私は、神の私の嫁に「いくさの準備をさせたのだろうか」と訊いた。その女は「ポンヤウムペは容貌でも勇者としても優っているが、私はポンヤウムペから嫌われていたからひどく苦しめて彼に仕返しをしようと思う。」と言った。

酒を飲んでいて勇者たちが、夜中に舟の所へ行って見ると舟は全部流されてしまい、砂州の上には一艘の舟も残っていなかった。また、舟に積んでいたいくさで使う武器や、食べ物なども奪われ、無くなっていた。神を持つ者ポンヤウムペと呼ぶ者であり、神の淑女をいくさの理由にたくさんのいろいろなものを私たちは運んだのにそれにまったく気づかずにいる。今すぐに私たちは逃げましょう。なぜ私たちはポンヤウムペたちにいくさを仕掛けたのか、神の淑女に対して恥ずかしい。と言いながらこっそりと天空上へ昇って行きどこやらに逃げてしまった。

私は自分自身の上に土をかぶせて、他の人には見えないようにカムフラージュしていると、神の私の嫁がシヌタブカへやって来る音が聞こえ、破裂したような音が響いた。神の私の嫁は、空から降りてきて茫然と凍りついたように立ちつくしていた。

神の私の嫁は「ポンヤウムペはひどい人間の血統であり悪い人間の血統である。私は欺かれ、心の底からそれをほんとうのことだと信じ込み、私の悪い夫、このように夫に私は頼み大勢の人々をどこかに行かせてしまったことなのだろうか。いくさの中で私が使った物はどこにあるのだろうか。ああ忌々しい。私はポンヤウムペ（私の夫）へ仕返しできたら、私は安心できるのだが。私はポンヤウムペに恥をかかされた。私を欺いたことに関し私の仕返しを覚悟しておけ。コタンラウムマツは美貌を持つ淑女であるから、あなたはコタンラウムマツと結婚したいと思い、あなたが私にひどい恥をかかせたことがほんとうに悔しいのです。」と言った。

私の同族の人たちはほんとうの勇者であり、おかげで私がシヌタブカを穏やかに治めていたが、先祖の尊い村を守るために疲れ果ててしまった。私はあなたたちを労い感謝の証として拝礼します。

私は「これからは特別私たちにとって煩わしいものはなく、楽しい酒宴の席を持ち美味しい食事を取りながらよいことでも悪いことでもいろいろと話し合っ、楽しみながら神に祈祷の儀式をしましょう」と言った。この儀式の後に私たちは結婚することになっている。

「神の私の嫁」と呼ばれる者、私の妻は神の人間の女では全くなく、悪い悪魔が取り憑いた者であり、悪事をするものであることは私にはよく分かった。私を憎みいじめ苦しめられることに悪魔払いの雄叫びの声を上げ、私を避けていたけれど少しも恐ろしくはなかった。

如何にすれば見物の神々や私たちが祭る神がたくさんいる天国で神の私の母も振り返るところにおいて、その魔物を私はひどく罰し、湿った死者の国へ六つの下界に私は魔物を行かせたが、どうなったのかもまったく知らないことにひどく驚いているだろう。

その原因としてほんとうにそれで私が幸せになれるものであるから神々はみんな私の心の上を通して見抜いていたのだろう。これからはほんとうに喜んで、私たちは一緒にあらためて酒宴に参加するつもりだ。

コタムパウムマツは、年若い兄と結婚することになった。私の育ての姉は、コタンラウンクルと結婚することになった。

私はコタンラウムマツを妻にしてシヌタプカの上流と下流を治めることにした。一緒に私たちは健康に成長したことを私は嬉しく思い、これからシヌタプカの立派な御座所の中で私たちは結婚して、私は上流と下流の方を治めましょう。私は「あなたは類い稀な霊力のある女性であるので、心の底から心の中から私はあなたを頼りにしている。」と言った。いつ何時また悪い魔神に嫉まれるのか否かは、ただ神だけに私は任せるけれどあなたは淑女の行い神の行いを持って私に炊事をして食事の世話をして下さい。

私の兄夫婦コタンラウンクル、年若い私の兄夫婦コタムパウンクル夫婦、私たち夫婦は二日三日ほど美味しい食事をしながら楽しい酒宴の間には悪いことでもよいことでも私たちはいろいろ話し合っって楽しく過ごし、年若い私の姉がまず先にその長持ちを背負ってコタンラに行くために外に出て行き、コタムパウムマツも長持ちを受け取るために外に出て行き、コタンラウムマツも長持ちを受け取るためにコタンラに行った。人間の女たちは嫁の風習であるから長持ちを受け取るために一緒に外に出て行ってしまった。

私はシヌタプカまで飛んで行き、家の中へ入ってみると年若い私の姉が長持ちを背負って私より先にコタンラに帰って来て、家の中がきれいに掃除されていてきらきらと輝いていた。火が焚かれ右座のそばに私は座り、神の老媪も右座の上手に座り、礼拝をしながらこれから私たちはそれぞれの相手と夫婦になることを神々たちに報告し私は安堵した。

そのときに外庭の上手にコタンラウムマツ私の結婚相手（妻）が来た。私は「どこからか淑女がやって来ると思っていた。私には召使いもおらずただ一人きりいるので、招待した人もいないので、さあ早く入って来て下さい。」と言った。私は妻を抱きしめ愛撫し顔の上に接吻をした。私は「あなたは類い稀な霊力のある女性であるから私の心の中を見抜いているだろうか。これからは私のことを神が振り返るだろう。今からはこの立派な御座所の中に私たちは居を構え夫婦で、先祖の後を私たちは発展させましょう。そして私の面倒を見て炊事をしてくれるよう頼みます。」と言った。

妻は「私は少しも年若い私の兄神のようなお方を罵（ののし）っているではありません。

私の行いを後悔し、私は恥ずかしく思い、長い間苦しんでいたのです。誰も悪いのではなく私が悪いのです。」と謝った。

私の妻は、ご飯を炊き、穀物の大きな山盛りを頭上に捧げたものを私は受け取った。私は半分を食べてから妻に捧げて渡した。

私たちは先祖の寝床に二人で寝て眠りましょう、と言いながら二つの寝床を設えるように頼んだ。「あなたは先に寝てください。私は火の始末をしてから寝ることにしましょう。」と私は言った。

私の妻の寝る辺りが何か黄金の群れがあたり、一面に散らかりその音ははなはだしくちやりんちやりんと鳴り響くように、私には思えた。音が途絶え驚いた私は、自分の後方を振り向くと、同時に私の妻の驚きの叫び声のあと泣く叫び声を高く上げた。何かある物を上げたり下ろしたりを繰り返していると、それとともに閃光が稲妻のように光を放った。見てみるといわゆる人間の女の守り神、小さい帯、すなわち白銀黄金を集めたもの黄金の美丈の帯の真ん中がすっかり切れてしまった。この小さい帯の切れ端に私は驚いた。

私の妻は「これは化け物がいる証なのだ。」と言った。ほんとうに恐ろしいことやぞっとすることの前に化けることなので、はるか昔から先祖の言い伝えは次のようであった。

「津波と土砂崩れが行き違い、尊い村も滅ぼされる。美貌と技芸に優れその心が美しい若い処女であれば村を守ることが出来る。」というものだ。その妻の旦那も自分の憑き神の力が弱くなるものなのだ。

私の嫁は魔神であるからどこまでもみんなから嫉まれた。それゆえに尊い神々たちは急に振り向きはしないものだから神々の両眼の間の先を越して、魔神たちに頼んで津波土砂崩れなどが起こるようにしていることが私にはわかった。

年若い兄は、その女（妻）と接吻もすることなく別れ別れになる。年若い兄は、その女を自分の村まで送っていくことになった。

神とともに無礼なことを言われたので、六つの下界を踏みつけ、悪魔が取り憑きトミサンペチシヌタブカを滅ぼすことができるだろうか？

トミサンペチシヌタブカを守ることを貧乏人の娘に頼みましょう。

私の妻は「私は貧乏人の夫婦が暮らしている様子を聞いていた。本当に年を取った老夫婦の一人娘が、村を守ることを承知するだろうか。」と言った。

老夫婦は私に向かって「あなたは霊力のある人であるから、幸いにも私たちは貧乏人の夫婦で、一人娘を持ち私たちが暮らしていることをあなたは知って、このように私の娘でもって尊い村をあなたは守りたいとあなたが思っていることは賢い心をあなたは持っており感心し褒めることばが無い」と言った。

私は老夫婦に感謝した。妻が神から預かった装束品が女の宝物と一緒に揃っていて、その娘に渡した。顔や足や手などを丁寧に洗い、その衣装に着替えた。立派な刺繍衣をかき重ねて着て絹織物の帯を胴に巻き、立派な鉢巻きでもって髪を高く押さえて喉の上、耳の上、黄金の首飾り、神の耳環をいっぱいつけきらきらと輝きほんとうに立派な様子である。

老夫婦は「ありがとうございます 貧乏人であるからみんな一緒にひどいぼろきればかりを私たちは着ていることであつたのに、神の思し召し、私の娘も神が恵みを与えているので神の妹のように立派すぎること感心しています。」と言った。

私は「あなたたち老夫婦を自分の親のように孝行します。」といった。
その娘にはトミサンペチ川に沿って上り、その川を守ってもらうことにした。その娘の力によって、トミサンペチは守られた。いつまでも何不自由なく私たちは暮らしている。
<おわり>